

発達障害への潜在的態度と学生支援への意識との関連

自閉スペクトラム症と視覚・聴覚障害への合理的配慮における比較検討から

○横田晋務¹ 松崎 泰² 田中真理³

1 九州大学基幹教育院 2 東北大学加齢医学研究所 3 九州大学

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 潜在的態度 合理的配慮

【目的】

近年、発達障害学生は増加傾向にあり、特にその中でも自閉スペクトラム症(ASD)の割合が最も多く(日本学生支援機構, 2017)、ASDのある学生に対する支援の充実喫緊の課題である。障害学生支援を考える際に重要な概念である合理的配慮では、教育の機会均等が目指されるため(文部科学省, 2012)、ASD学生への支援に対する教職員や周囲の学生などの公平感を担保する必要がある。ASDは、肢体不自由や感覚障害とは異なり、周囲の学生や教職員から障害が可視化されにくいために、困難さと支援への理解が得られにくいことが問題点として挙げられる(高橋, 2012)。ASD学生に対する支援の認識については、対象による違い(山本・仁平, 2010)や知識との関連(滝吉・五十嵐, 2015)が検討されているが、①障害に対する態度との関連や②可視性の程度が異なる障害種による支援認識の違いについては知見が少ない。以上より、本研究では、人間の行動により関連するとされる潜在的態度(Stanley et al., 2008)に焦点を当て、障害の可視性の違いによる潜在的態度の比較、および支援認識との関連について検討することを目的とする。

【方法】

【対象】定型発達大学生 33名(平均年齢 18.9歳; 男性 15名、女性 18名)。研究目的、方法を口頭、書面にて説明の上、同意を得た。また、研究実施にあたり、東北大学医学系研究科研究倫理委員会の承認を得た。**【行動実験】**障害に対する潜在的態度を測定するため、Implicit Association Test(IAT; Greenwald, 1998)を用いた。IATは提示された絵や単語をカテゴリ分類する課題である。障害者(不可視(ASD)/可視(視覚・聴覚障害))と健常者を表す絵については、「障害者」「健常者」に、形容詞については「良い」「悪い」に分類することを求めた。課題実施はノートPCを用い、Presentation (Neurobehavioral Systems, US)により、刺激提示、および回答・反応時間計測を行った。誤反応数、反応時間を加味し、潜在的な態度を反映する D スコアを Greenwald(2003)のアルゴリズムを用いて算出した。**【質問紙調査】**横田ら(2017)と同様の質問紙を用いた。ASD、および視覚・聴覚障害のある学生に対する支援のうち、①ルール・慣行の柔軟な変更 8項目についてどの程度行うべきか(許容度)、②個別支援 8項目について、教職員、学生がどの程度支援すべきか、および自分がどの程度支援出来るか(支援可能性)について、回答を得た。質問紙の内容は、学生の特徴とそれに対して考えられる支援からなる。学生の特徴については、ASDの特徴を有した記述と視覚・聴覚障害の特徴を記述した項目が存在し、その特徴に対する支援内容は、障害種間で一致している。**【手続き】**質問紙、および実験の内容により、対象者を 2群に分けた(ASD群/視覚・聴覚障害群)。実施は個別に行われ、対象者は質問紙に記入後、行動実験を行った。**【分析手続き】**D score および各質問項目に対する回答は、標準化したのち、統計的検定に用いた。障害種の違いによる潜在的態度の差を検討するため、年齢、性別、障害の知識の程度を共変量とした共分散分析を行った。また、潜在的態度と支援への認識について、Pearson の積率相関係数を算出した。以上の統計解

析については、SPSS version 22 (IBM, Japan)を使用した。

【結果】

【潜在的態度】 ASD に対する潜在的態度は、視覚・聴覚障害に対する潜在的態度よりも否定的な傾向にあることが明らかになった($F(1) = 3.67, p = 0.07$)。

【潜在的態度と支援への認識の関連】 ASD 群においては 8 種類の支援のうち、自分が障害学生に対し、話しすぎであることを教えることへの支援可能性と潜在的態度との有意な負の相関が明らかとなった($r = -0.54, p < .05$; Fig. 1)。視覚・聴覚障害群においては、ルール・慣行の柔軟な変更 3 項目(提出物の期限延長; $r = -0.55, p < .05$ 、実習時に詳細なマニュアルを作成; $r = -0.65, p < .01$ 、評価方法の代替; $r = -0.52, p < .05$)、および自分が行う支援可能性 1 項目(教員や学生の発言意図を説明する; $r = -0.52, p < .05$)で、潜在的態度との有意な負の相関が認められた。

【考察】

本研究の結果より、ASD に対する潜在的態度は、可視性の高い障害に対するそれよりも否定的な傾向にあることが示された。したがって、ASD 学生の困難さや、支援の必要性については、周囲の学生から理解されづらい状況にあることが明らかになった。

潜在的態度と支援認識との関連について、ASD 学生への支援に対する認識では 1 項目のみ、可視性の高い障害に対する支援については、複数の項目で関連がみられた。これらのことから、可視性の程度により、潜在的態度と支援への意識の関連が異なること、および可視性の程度が同じでも、支援内容によって関連の程度が異なると考えられる。特に、ASD 学生への支援に対する意識は、ASD に関する知識の程度と相関することが明らかになっているため(横田ら, 2017)、ASD 学生への支援については、支援内容によって、支援への意識と潜在的態度、知識の関連の仕方が異なると考えられる。今後は、潜在的態度や知識の変容と支援への意識との関連について検討していく必要があると考えられる。

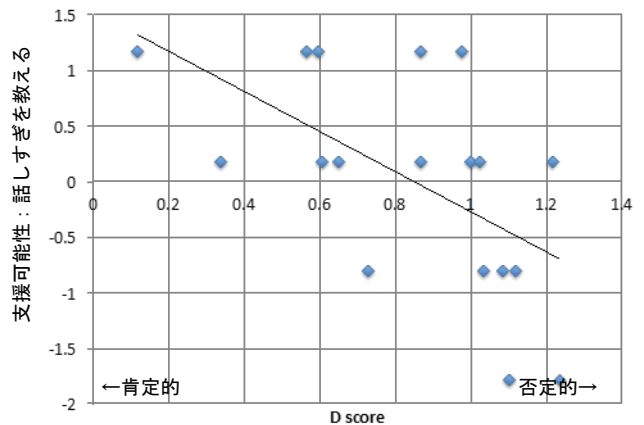


Fig. 1 ASD に対する潜在的態度と支援可能性に対する認識
本研究は、科学研究費補助金 基盤研究(B) 23330270 代表 田中真理により実施した。

(YOKOTA Susumu, MATSUZAKI Yutaka, TANAKA Mari)